

被服のための身体計測に関する研究(第1報)

— 岩手県の3中学校女子の計測結果 —

清水 房・池田 揚子・荒井 享子

ま え が き

“被服学研究の中心課題は、人間と被服との関係を追求するにある”という考え方に立って、この方面の研究の現状を見た時、人間不在の研究が巾をきかせているという感じを抱くものである。又、被服教育の面においても、学習の能率化をはかるという立て前で取り上げられている型紙教育は、全国一律の型紙によって、人間を型紙にはめるような取り扱いに陥入りやすい傾向が見受けられる。そこで著者等は、地域の実態に即した人間中心の考え方に立って被服学研究を推進するため、本研究を取り上げ、第1報として、岩手県内3地区の中学校女子生徒の身体計測結果について、その一部を報告する。

I. 調査の目的

中学校技術・家庭科女子向学習系列における被服製作指導では、その能率化をはかるため型紙教育を取り入れているが、全国一律に作られた数種の型紙では、じゆうぶんに指導の目的を達成することができない。そこで、本県における女子中学生の体型的特徴を把えて、指導方法の改善に役立てるため、調査研究を行った。

II. 調査の時期

1967年7月から8月にかけて、対象学校及び対象生徒の家庭の承諾を得た上で、決定し実施した。学校別調査期日は次のとおりである。

岩手大学付属中学校 1967年7月18日～19日
紫波町立紫波第一中学校 1967年7月21日～22日
山形村立山形中学校及び霜畑中学校 1967年8月21日～22日

第1表 地域別学校名及び調査数

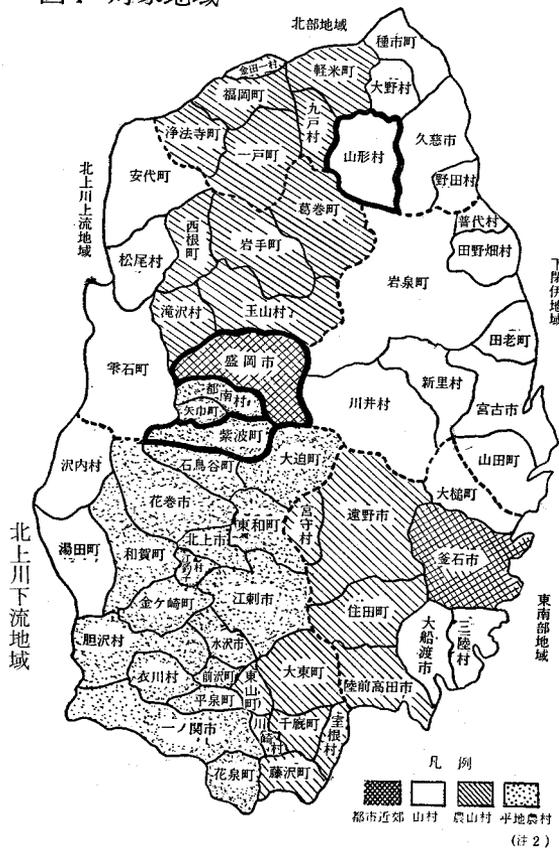
地 域	学 校 名	調 査 数	学 年		
			1	2	3
都 市	岩手大学付属中学校	143	52	48	43
農 村	紫波第一中学校	160	55	55	50
山 村	山形・霜畑中学校	129	45	39	45
計		432	152	142	138

III. 調査対象

県内、都市地域、農村地域、山村地域（図1）から、それぞれ1～2校を逆定し、そこに在籍する女子生徒から無作為に、各学年50名を並び、1校150名を目標にした。逆定した学校名および学年別調査数は、第1表のとおりである。目標の150に対して、紫波第一中学は107%の充足率であったが、他の2校は付属中で95%，山形・霜畑中では86%に止まった。これは、クラス編成上の都合や、在籍生徒の絶対数不足によるものである。

次に調査対象者の家庭の職業構成は、第2表のとおりである。職業構成比によれば、地域の特色が明らかになっている。すなわち、農林業の比率は、山村、農村、都市地域の順に小さく、給料生活者の比率はその逆で、出稼は山村地域の特殊性を示し、その他自由業は都市地域の特色として表われている。なお、総体的には、全県の職業構成比にはほぼ近い値が得られた。つづいて父母の出生地を県内、県外別にみると第3表のとおりである。

図1 対象地域



第2表 職業構成

() 内は%

学校別	調査数 (%)	職業区分					
		農林業	工業	商業	給料生活者	出稼	その他自由業
A	143 (100.0)	4 (2.8)	4 (2.8)	17 (12.0)	93 (65.0)	0 (0.0)	25 (17.4)
B	160 (100.0)	77 (48.0)	3 (1.9)	19 (12.0)	49 (30.6)	1 (0.6)	11 (6.9)
C	129 (100.0)	85 (66.0)	1 (0.8)	11 (8.5)	15 (11.6)	8 (6.2)	9 (6.9)
計	432 (100.0)	166 (38.3)	8 (2.0)	47 (10.9)	157 (36.3)	9 (2.1)	45 (10.4)

注1 (図1)は、農林省統計調査部の経済地帯区分による。

注2 文中、表中においては、岩手大学付属中学校をA、紫波町立紫波第一中学校をB、山形村立山形霜畑中学校をCという記号を用いることとする。

第3表 父 母 出 生 地

()内は%

区 分	A		B		C		合 計	
	県 内	県 外	県 内	県 外	県 内	県 外	県 内	県 外
父	114 (80)	29 (20)	151 (94)	9 (6)	126 (98)	3 (2)	391 (91)	41 (9)
母	105 (74)	38 (26)	156 (98)	4 (2)	128 (99)	1 (1)	389 (90)	43 (10)
両 親	90 (63)	/	149 (93)	/	125 (97)	/	364 (84)	/

第4表 初 潮 年 令

事 項	学校区分 学 年	A			B			C		
		中 1	中 2	中 3	中 1	中 2	中 3	中 1	中 2	中 3
総 数		52	48	43	55	55	50	45	39	45
既 潮 者 (既潮者%)		26 (50.0)	40 (91.7)	43 (100)	28 (50.9)	46 (83.6)	50 (100)	18 (40)	33 (84.6)	41 (91.9)
未 潮 者		26	8	0	27	9	0	26	5	4
不 明		0	0	0	0	0	0	1	1	0
3年次初潮年令平均				12年6ヶ月			12年7ヶ月			13年5ヶ月

初潮年令の傾向をみるための資料として、第4表を作成した。これによると、都市と農村では余り差がみられないが、山村部との開きは大きい。

IV. 調 査 方 法

1. 計測部位

長径項目は14項目、幅径項目は1項目、周径項目は8項目、その他3項目の合計26項目について計測を行った。次にその一覧を示せば、第5表のとおりである。

2. 計測用具

(1) 計 測 器

- a MARTIN の身長計 (横規 2本つき)
- b 巻 尺 (J I S—鋼製, 長さ—200cm, 巾—0.5cm)
- c 触 角 計
- d 直 定 規 (10cm, 20cm, 30cm 一組)
- e 消 毒 器
- f 皮下脂肪計 (榮研式)
- g 計 測 台 (直径 55cm の円形, 木造)
- h 水 準 器
- i 体 重 計

第5表 計 測 項 目

区分	計 測 部 位	区分	計 測 部 位	
長 径 項 目	身長	幅 項 径 目	背 肩 巾	
	右前上腸骨棘高		乳 頭 位 胸 囲	
	右膝関節高	周 径 項 目	胴 腰 囲	
	右前胸高		頸 付 根 囲	
	右後胸高		右 上 腕 最 大 囲	
	股の長さ		右 大 腿 最 大 囲	
	股上前後の長さ		右 頭 囲	
	総背丈		そ の 他	背 部 皮 下 脂 肪 厚
	右肩中心からウエスト後中心			上腕部
	" " 前中心		体 重	
右袖丈				
右足長				
右外果高				

(2) 補助用具

- a ネットチェーン (銀メッキ製, 長さ 80cm 内外, 重量 10.5g)
- b ウエスト用ベルト (長, 中, 短, 3種)
- c 細丸ゴムテープ (60cm 内外)
- d セルロイド板 (大, 中, 小, 3種)
- e サインペン (計測点記入用)

(3) 記録用具

- a 記録用カード
- b 記録板
- c 鉛 筆 (H B.)
- d 消 ゴ ム

(4) そ の 他

- a アルコールと脱脂綿
- b 消毒液とガーゼ
- c 石けん, タオル, 洗面器
- d ワセリン (メジャー拭きとり用)
- e テーブルかけ 3枚
- f 脱衣袋 (ポリエチレン 10枚内外)
- g スリッパ (大, 中, 小, 各5枚程度)
- h ヘアークリップ, 安全ピン
- i マジックインキ (動線指示用)
- j おしぼり入れ 3筒
- k チョーク, メモ用紙, 鉛筆削器等

3. 計測方法

昭和41年度～42年度の2ケ年にわたり、全国17ヶ所で行った、工業技術院の依託研究の際、用いた計測方法に準拠した。この計測法は、MARTINの計測法を基礎にして、お茶の水女子大学柳沢澄子教授が、特に被服のために研究改善を加えられた方法で、氏の直接指導によって習得したものである。

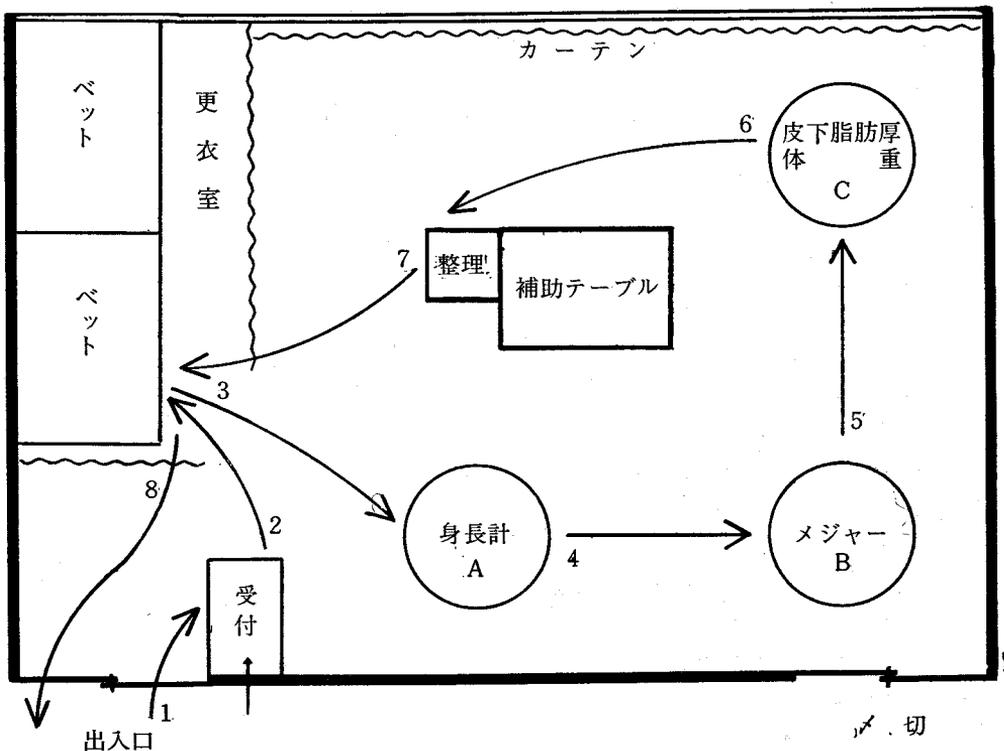
(1) 計測者の構成

- 身長計を担当する者 1名と補助者1名
- メジャーを担当する者 1名と補助者1名
- 皮下脂肪計、体重計担当者 1名
- 受付・準備、整理担当者 1名 以上計6名で実施した。

(2) 配 置

各会場の配置は、部屋の広さや窓・入口の位置などによって多少異なるが、一例を示せば、図2のとおりである。被計測者は矢印の方向に、数字の順に従って移動することとする。

図2 B の例 (保健室使用)



(3) 計測手順

実際の計測手順は、能率化する為に、流れ作業方式を取り入れ、次のように行った。

ア 受付・準備

計測記録カードを配布し、被計測者は、自分の氏名、生年月日、父母出生地、自分の生育地、初潮年令、家庭の職業、等必要事項を記入。計測時は、スリッパ着衣状態となり、計測用ベルト着用の上椅子に腰かけ待機する。

イ 計測者 A (身長計使用。補助者1名)

- ① 被計測者を椅子にかけさせて、脛骨点を左手でとって、右膝関節高を計測。
- ② サインペンで、次の計測点に印をつける。(直定規20cm, ゴムひも, ネットチェーン使用)
頸椎点, 左右の肩先点, 肩縫目線
- ③ 身長を測る。
- ④ 右乳頭高を背面正中線上に移す。(乳頭位胸囲計測の際, 背部における計測位置を決定する点となる)
- ⑤ 後胴高を測る。
- ⑥ 前胴高を測る。
- ⑦ 左手で右前上骨棘高をとって, 計測。
- ⑧ 股の高さを測る。(セルロイド板(大)使用。

ウ 計測者 B (メジャー使用。補助者1名)

- ① 背丈を測る。(セルロイド板(小)使用。)
- ② 総丈を測る。
- ③ 背肩幅を測る。
- ④ 右肩中心から, ウエストライン後中心までを測る。
- ⑤ 右肩中心から, ウエストライン前中心を測る。
- ⑥ 右袖丈を測る。
- ⑦ 右上腕最大囲を測る。
- ⑧ 頸付根囲を測る。
- ⑨ 乳頭位胸囲を測る。
- ⑩ 腰囲を測る。(セルロイド板(中)使用)
- ⑪ 股上前後の長さを測る。
- ⑫ 右大腿最大位を測って, ベルトをはづす。
- ⑬ 胴囲を測る。
- ⑭ 椅子に坐らせて頭位を測る。

エ 計測者 C (皮下脂肪計, 直定規, 触角計使用)

- ① 背部皮下脂肪厚を測る。
- ② 上腕部皮下脂肪厚を測る。
- ③ 右外果高を測る。(直定規 10cm を使用)
- ④ 右足長を測る。(触角計を使用)
- ⑤ 体重を測る。(体重計使用)

オ 受付・整理

- ① サインペンの跡をふきとる。
- ② カードの26項目の記入確認。
- ③ カードの整理。

V. 結果および考察

今回は, 学年をプールして, 横断的に3つの地域の学校を考察することとする。

1. A, B, C 別, 学年別に26項目ごとの平均値を求め, 更に学年をプールして, 地域類型別,

第6表(1) 学校別26項目の平均値標準偏差の結果

測定部位	A 校			B 校			C 校					
	N	\bar{x}	s	N	\bar{x}	s	N	\bar{x}	s			
長径項目	身長	143	153.70	5.56	>	160	151.90	5.02	>	129	148.31	5.33
	右前上腸骨棘高	143	82.43	4.02	>	160	81.83	3.58	>	129	78.99	3.40
	右膝関節高	142	40.53	2.55	<	160	41.16	1.92	>	129	40.49	1.73
	前胴高	143	95.70	4.48	>	160	94.50	4.05	>	129	91.55	3.97
	後胴高	143	94.90	4.24	>	160	93.67	3.67	>	129	91.07	3.68
	股の高さ	142	70.67	3.41	>	160	69.27	3.56	>	129	67.32	3.35
	股上前後の長さ	143	67.83	4.75	>	160	67.00	4.53	>	129	65.92	4.13
	総丈	143	128.77	5.17	>	160	126.53	4.84	>	129	123.19	4.92
	背丈	143	35.63	1.98	<	160	36.70	1.93	>	129	36.15	2.01
	右肩中心から後中心	143	37.57	2.11	<	160	37.90	2.26	<	129	38.58	2.10
	右肩中心から前中心	143	37.03	1.96	>	160	36.77	3.36	>	129	35.90	1.94
	右袖丈	143	49.17	3.42	>	160	48.00	2.23	>	129	47.10	2.14
	幅径項目	右足長	142	22.53	0.88	>	160	22.30	0.86	>	129	22.22
右外果高		142	5.98	0.43	>	160	5.80	0.44	<	129	5.83	0.45
背肩幅		143	37.70	2.25	=	160	37.70	1.84	>	129	36.58	2.21
乳頭位胸囲		143	76.90	4.91	>	160	76.47	5.63	>	129	75.43	4.59
胸囲		143	58.03	3.69	<	160	59.37	4.89	<	129	59.52	3.51
腰囲		143	84.85	4.88	>	160	84.55	5.67	>	129	82.49	4.96
頸付根囲		143	34.03	1.66	>	160	33.60	2.08	<	129	34.85	1.49
右上腕最大囲		143	22.62	1.97	>	159	22.32	2.32	>	129	21.45	1.96
右大腿最大囲		143	43.09	3.96	>	158	42.95	4.28	<	129	42.97	3.69
右膝囲		143	34.05	2.50	>	160	33.04	2.23	>	128	31.95	2.11
その他	頭囲	142	54.03	1.67	>	160	53.81	1.47	>	129	53.42	1.38
	背部皮下脂肪厚	143	0.53	0.17	>	160	0.50	0.22	<	129	0.53	0.19
	上腕部皮下脂肪厚	143	0.56	0.19	>	160	0.55	0.19	>	129	0.51	0.17
体重	143	45.2	6.4	>	160	44.3	6.6	>	129	41.7	5.6	

N: 測定者数 \bar{x} : 測定値の平均 s: 標準偏差 <・>: 大小の方向を示す

体型の傾向を把えようとした。次に標準偏差を算出し、A, B, C間の比較を行い、差の検定をし、その結果を第6表(1)および第6表(2)に示した。第6表(2)に掲げた、身長、右前上腸骨棘高、前胴高、股の高さ、右袖丈の5項目は、特に有意差のみとめられたものである。また、これ等5項目については母平均の差の信頼限界の巾を比較して図3に示した。

以上のことから、身長では、AとB、AとC間に危険率1%で有意差が認められたが、BとC間には有意差がみとめられなかった。

その他の、右前上腸骨棘骨、前胴高、股の高さ、袖丈の4項目については、何れも危険率1%で、AとB、AとC、BとC間に有意差があることを正しいとみなし得る結果が得られた。

2. 第6表(3)は、3つの地域の学校の一括成績である。同時期に調査した比較資料は無いが、1964年7月から10月に亘って実施した、福島県の某中学生の計測結果³⁾があるので、今回の調査

注3) 高橋キヨ子他3名; 家政学雑誌, 86, 244 (1967)

と一致する計測項目——身長、総丈、背丈、袖丈、背肩巾、頸付根囲、胸囲、胴囲、腰囲、右上腕最大囲、体重——11部位について比較考察する。対象学年が、第2学年であるから、ごく一部

第6表(2) A 学校別平均値間の差の検定結果

1 身長				
要因	変動	ϕ	V	F_0
学校間	617.3	2	308.65	10.9**
学校内誤差	169.7	6	28.30	
計	787.0	8		

3 前胴高				
要因	変動	ϕ	V	F_0
学校間	266.6	2	133.3	102.5**
学校内誤差	7.8	6	1.3	
計	274.4	8		

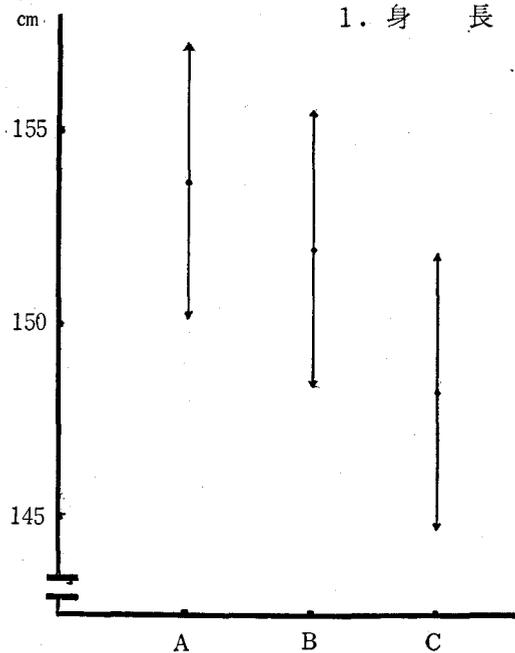
5 右袖丈				
要因	変動	ϕ	V	F_0
学校間	64.4	2	32.2	5.6*
学校内誤差	34.5	6	5.75	
計	98.9	8		

2 右前上腸骨棘高				
要因	変動	ϕ	V	F_0
学校間	206.5	2	103.25	49.2**
学校内誤差	12.6	6	2.10	
計	219.1	8		

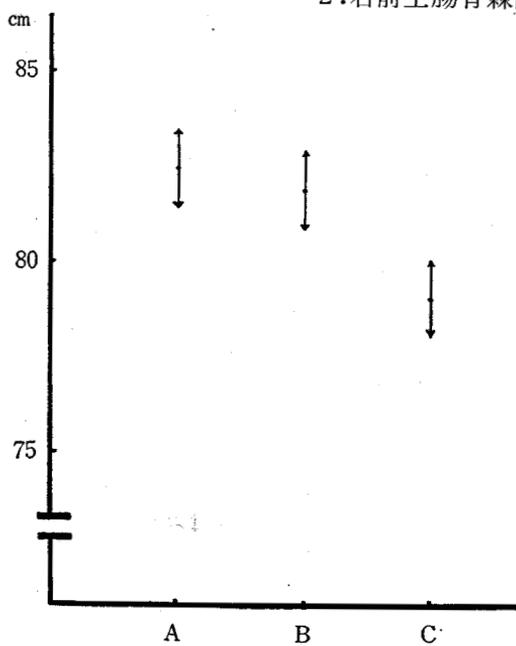
4 股の高さ				
要因	変動	ϕ	V	F_0
学校間	168.1	2	84.05	61.4**
学校内誤差	8.2	6	1.37	
計	176.3	8		

註記 ** は有意水準1%で有意
 * は有意水準5%で有意
 ϕ は自由度
 V は分散

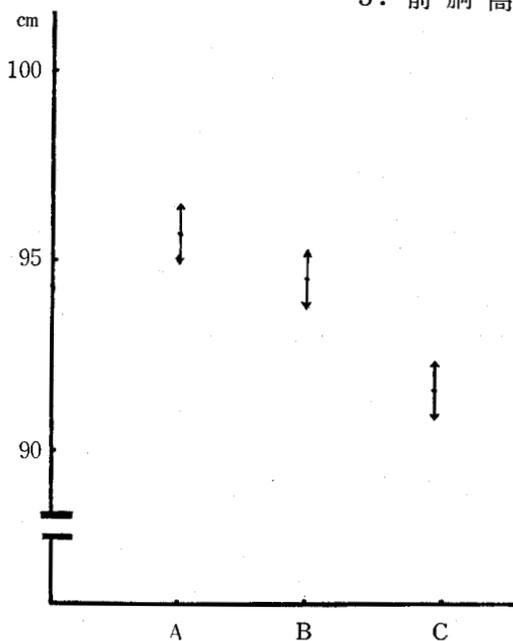
図3. 1.身長 2.右前上腸骨棘高 3.前胴高 4.股の高さ 5.右袖丈



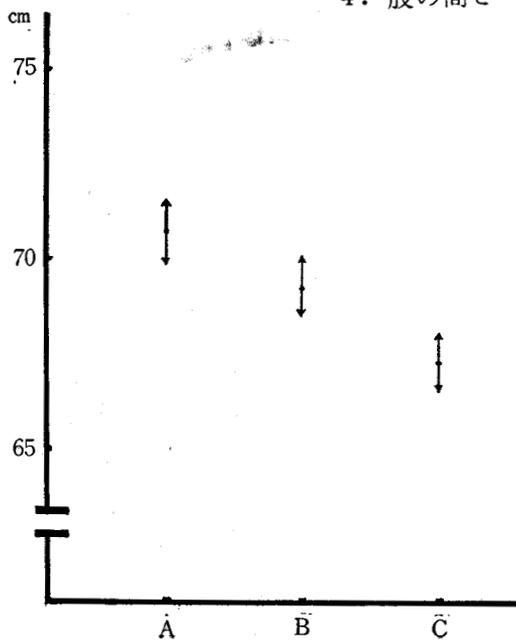
2. 右前上腸骨棘高



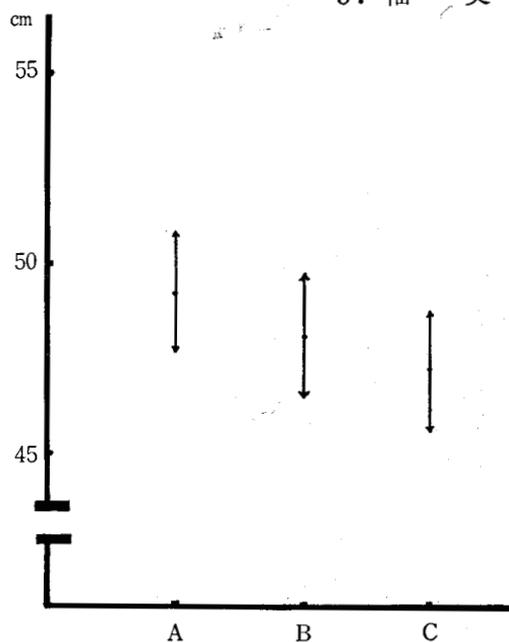
3. 前胴高



4. 股の高さ



5. 袖丈



B 母平均の差の検定

	身 長	右前上腸骨棘高	前 胸 高	股 の 高 さ	袖 丈
A — C	16.1**	10.4**	12.3**	10.0**	6.2**
A — B	5.4**	1.8**	3.6**	4.2**	3.5**
B — C	0.7	8.6**	8.7**	5.8**	2.7**

** は危険率1%で有意差のある事

の比較に止まらざるを得ないが、背肩巾を除く10項目は、実測値平均において、本県調査の第2学年に比較して、すべて福島が優位である。また、胸囲、背肩巾、背丈の3項目それぞれについて、対身長比を求めて比較したところ、胸囲対身長比においては福島が上廻っているが、他の項においては、岩手が高率を示している。特に背肩巾対身長比においてその差が著しい。このことから、福島の体型の方が、岩手にくらべて都市型の傾向を帯びていると考察される。

第6表(3) 3校一括の成績

区分	測定部位	N	\bar{x}	s	区分	測定部位	N	\bar{x}	s		
長 径 項 目	身 長	432	151.30	5.30	幅 徑 項 目	背 肩 幅	432	37.33	2.10		
	右前上腸骨棘高	432	81.08	3.67		周 徑 項 目	乳 頭 位 胸 囲	432	76.29	5.04	
	右 膝 関 節 高	432	40.73	2.07			胸 囲	432	58.97	4.00	
	前 胸 高	432	93.92	4.16			腰 囲	432	83.96	5.17	
	後 胸 高	432	93.21	3.86			頸 付 根 囲	432	34.16	1.74	
	股 の 高 さ	432	75.75	3.44			右 上 腕 最 大 囲	431	22.13	2.08	
	股 上 前 後 の 長 さ	432	66.92	4.47			右 大 腿 最 大 囲	430	43.00	3.98	
	総 丈	432	126.16	4.98			右 膝 囲	431	33.02	2.31	
	背 丈	432	36.16	1.97			頭 囲	431	53.75	1.51	
	右肩中心から後中心	432	38.02	2.16			そ の 他	背 部 皮 下 脂 肪 厚	432	0.52	0.19
	右肩中心から前中心	432	36.57	2.05				上 腕 部 皮 下 脂 肪 厚	432	1.54	0.19
	右 袖 丈	432	48.09	2.60				kg	kg		
	右 足 長	431	22.35	0.84				体 重	432	43.7	6.2
	右 外 果 高	431	5.90	0.45							

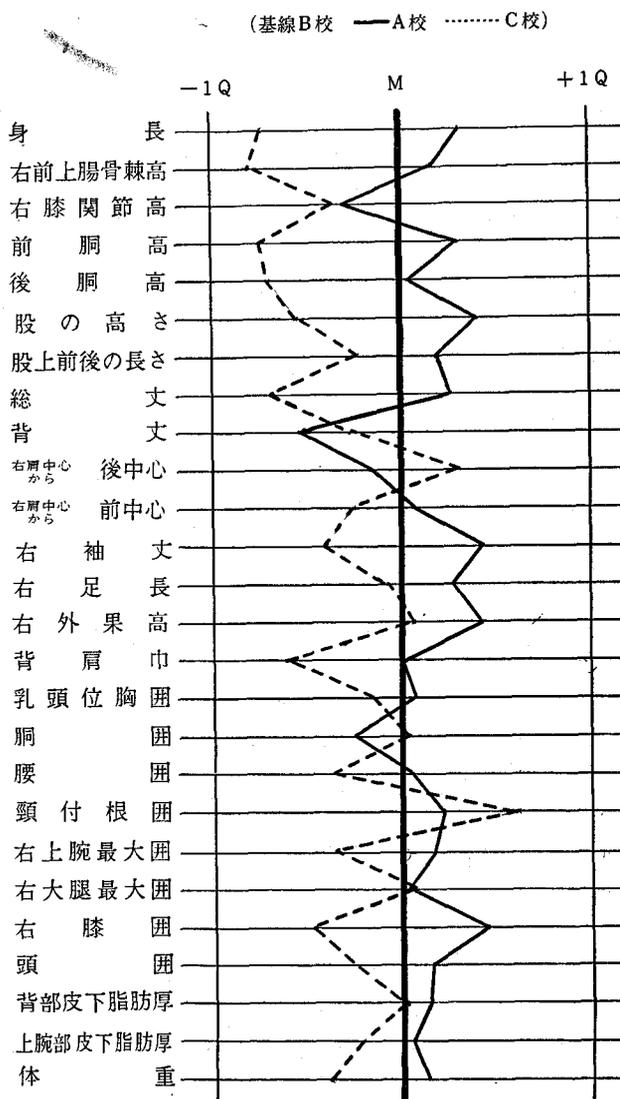
3. 文部省学校保健統計1966年4月実施の全国および岩手県成績と比較考察すれば、(計測時期がずれているので、文部省資料を操作修正して、ほぼ一致させて比較した。また、胸囲の計測位置や、身長計の器種のちがいが、体重測定時の着衣条件の差などがあるが、一応そのまま比較した。) その結果、今回の成績は3地域学校の平均値において、全県の指定統計成績とほぼ等しい値が得られている。地域学校ごとにみれば、Aは、身長、胸囲、体重共に、全国・岩手の成績を上廻っており、Bは、身長、胸囲は、全国・岩手何れよりも優位であり、体重は、全国平均よりはやゝ上廻っているが、岩手県成績とはほとんど差がない。Cは、3項目共に、全国・岩手の成績より下廻っている。

なお、文部省資料による岩手県の平均値は、全国成績より身長において0.5cm、胸囲は0.7cm、体重は0.5kg優れている。

4. MOLLISON の関係偏差折線⁵⁾による3校の体型比較図を図4に示し、前掲の第6表(1)とあわせて考察をする。

- (1) A>B>Cという傾向を示しているのは、身長、右前腸骨棘高、前胴高、後胴高、股の高さ、股上前後の長さ、総丈、右肩中心からW.L.前中心、右袖丈、右足長(以上10項目は長径項目)、乳頭位胸囲、腰囲、右上腕最大囲、右膝囲、頭囲(以上5項目は周径項目)、その他上腕部皮下脂肪厚、体重で合計17項目である。そうしてこの数は、全調査項目の65%を占め、特に長径項目において、AはBおよびCより優位な傾向を示していると考察される。
- (2) A<B<Cという傾向は、右肩中心から、W.L.後中心、および胸囲の2項目である。
- (3) ACという傾向は、右膝関節高と背丈の2項目である。
- (4) A>B<Cという傾向を示しているのは、右外果高、頸付根囲、および背部皮下脂肪厚の3項目である。
- (5) その他、A=B>Cという傾向が背肩巾において見られ、BとCにおいて殆ど差がなく、Aも非常に接近している項目に、右大腿最大囲がある。

図4 MOLLISON の関係偏差折線による学校別比較



5. 学校別並びに一括成績による身長と、長径項目(総丈、前胴高、後胴高、背丈、右袖丈、右足長)間の相関係数と母相関係数の信頼限界を第7表-1の(1)と(2)に、乳頭位胸囲と周径項目(胸囲、腰囲、頸付根囲、頭囲)・幅径項目(背肩幅)・その他(体重)との相関係数と母相関係

注5) <MOLLISON の関係偏差折線>

各項目の関係偏差を次式によって求め、その正負・大小にしたがって点を取り、その点を結んで折線をかく。

$$R. A. = \frac{M_2 - M_1}{Q} \quad \text{ただし} \quad \begin{cases} M_1 \dots \text{基準集団の平均値} \\ M_2 \dots \text{比較集団の平均値} \\ Q \dots \text{基準集団の標準偏差} \end{cases}$$

計測部位間の相関係数

数の信頼限界の表は、第7表の一2(1)と(2)に示した。

これによると、身長と長径項目の相関では、強い方から総丈、前胴高、後胴高、右袖丈、右足長、背丈の順になっており、中でも身長と総丈、前胴高の相関がより深い関係にあることを示している。

一方、乳頭位胸囲と周径項目、幅径項目、その他の項目との相関では、最も強い関係にあるのが、体重、次が、腰囲、胴囲、頸付根囲、頭位、背肩巾の順位である。

なお、身長と胸囲を軸とする、各項目との相関係数は、有意検定を行った結果何れも $\alpha=1\%$ の危険率で高度に有意であるとみなされる。

第7表一1 (1) 長径項目間

	学校別	総 丈	前 胴 高	後 胴 高	背 丈	右 袖 丈	右 足 長
身 長	A	0.953**	0.859**	0.873**	0.630**	0.747**	0.728**
	B	0.950**	0.918**	0.896**	0.659**	0.691**	0.620**
	C	0.885**	0.936**	0.897**	0.592**	0.794**	0.630**
総 括		0.929**	0.904**	0.889**	0.627**	0.744**	0.659**

(** 危険率1%で高度に有意)

(2) 母相関係数の信頼限界

	学校別	総 丈	前 胴 高	後 胴 高	背 丈	右 袖 丈	右 足 長
身 長	A	0.910 ρ 0.976	0.740 ρ 0.926	0.767 ρ 0.934	0.379 ρ 0.793	0.552 ρ 0.862	0.525 ρ 0.850
	B	0.904 ρ 0.974	0.843 ρ 0.958	0.805 ρ 0.947	0.415 ρ 0.810	0.465 ρ 0.832	0.360 ρ 0.788
	C	0.795 ρ 0.939	0.881 ρ 0.966	0.812 ρ 0.945	0.390 ρ 0.785	0.640 ρ 0.890	0.395 ρ 0.786

第7表一2 (1) 周径・横径・その他項目間

	学校別	胴 囲	腰 囲	頸付根囲	頭 囲	背 肩 幅	体 重
乳胸 頭 位囲	A	0.708**	0.802**	0.546**	0.627**	0.450**	0.822**
	B	0.883**	0.870**	0.757**	0.502**	0.528**	0.888**
	C	0.699**	0.837**	0.673**	0.447**	0.534**	0.835**
総 括		0.763**	0.813**	0.659**	0.525**	0.504**	0.848**

(** 危険率1%で高度に有意)

(2) 母相関係数の信頼限界

	学校別	胴 囲	腰 囲	頸付根囲	頭 囲	背 肩 幅	体 重
乳胸 頭 位囲	A	0.500 ρ 0.840	0.710 ρ 0.910	0.295 ρ 0.745	0.510 ρ 0.722	0.105 ρ 0.608	0.760 ρ 0.870
	B	0.695 ρ 0.910	0.760 ρ 0.932	0.570 ρ 0.868	0.376 ρ 0.614	0.240 ρ 0.730	0.849 ρ 0.917
	C	0.480 ρ 0.835	0.710 ρ 0.910	0.450 ρ 0.820	0.296 ρ 0.578	0.265 ρ 0.740	0.773 ρ 0.882

VII. 総 括

都市、農村、山村3つの地域類型による中学生の体型の特徴を把握、被服構成指導の改善に資するための基礎資料を得ることを目的に身体計測調査を行い、大要次のような結果が得られた。

(1) 現時点においては、地域類型によるところの体型の相違は明らかであり、特に山村地域と

他2地域との間の開きが顕著である。両者間の特徴をみると、都市地域では長径項目において優位な傾向を示しており、農村部では、背丈が優位で、右肩中心からウエストライン前中心と、右肩中心からウエストライン後中心とでは、3地域の平均値の大小傾向が逆転しており、都市農村、山村の順に前傾姿勢の体型傾向が表われている。

また、山村部では背丈・胴囲・頸付根囲などに特徴がみられる。

(2) 差の検定結果にもとづいて総括をこころみると、都市と農村間および都市と山村間の平均値差は、殆どの項目で、都市地域が優位であり、殊に身長、右前上腸骨棘高、前胴高、股の高さ、右袖丈の5項目においては、何れも $\alpha=1\%$ の危険率で有意差がみとめられた。特に差の大きい項目は、股の高さと右袖丈であるが、対身長比において比較すれば殆ど差がない。

また、農村と山村間では、殆どの項目で、農村地域が優位であり、殊に右前上腸骨棘高、前胴高、股の高さ、右袖丈においては、何れも $\alpha=1\%$ の危険率で有意差がみとめられた。

(3) 相関係数を求めた結果を総括すれば、身長と長径項目間では、背丈との相関が、他の5項目（総丈・前胴高・後胴高・右袖丈・右足長）にくらべて低いという点と、乳頭位胸囲と周径・幅径・その他の項目間では、背肩巾との相関が他の5項目（胴囲・腰囲・頸付根囲・頭囲・体重）にくらべて弱い関係にあるということから推測すれば、被服構成の指導における、この部位の計測は、個々の体型に当て吟味し、型紙教育の面では、型紙補正の段階で特に留意すべき箇所であるといえることができる。

以上、第一報としては、学年をプールして横断的に三つの地域の比較を中心に稿をまとめたが今後の研究方向としては、縦断的に年令段階を追った変化の追跡を進めてみたいと思う。そうして、これら二つの方向から、各地域、各学年に即した、効果的な被服構成教育のあり方を追求して行く考えである。

稿を終るにのぞみ、計測法について直接、御指導をいただいた、お茶の水女子大学柳沢澄子教授、ならびに、調査地域の逆定など全般にわたって貴重な御助言を賜りました、本学鷹嘴テル先生に深く感謝を申し上げます。また、計測調査に多大の便誼を与えて下さった、各地教委当局および学校当局、さらには、計測に協力いただいた、千葉禎・武藤百合子両氏等にこころから厚く御礼申し上げます。